





開
高
健

シブイ

一九九〇年五月八日 初 版
一九九〇年七月五日 初版第五刷

著 者——開高 健

発行者——堀出一郎

発行所——株式会社ティビーエス・ブリタニカ

〒102 東京都千代田区三番町二八番地一 秀和三番町ビル

電 話 販 売 (〇三) 二三八一五七二一

お客様相談室 (〇三) 二三八一五七二一

振替 東京 一 一 一 三 一 三 三 四

印刷・製本——図書印刷株式会社

© Takeshi Kaiko, 1990

ISBN4-484-90214-1

Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取り替えます。

シブイ
目次

究極の遊び 七

君よ知るや馬の国 一七

ニューヨークの魅力と魔力——その1悪魔と天使 二九

ニューヨークの魅力と魔力——その2性と死 四一

匂いの研究 五七

元結いの秘密 七一

ダイヤモンドと雑草 八一

けったいな酒——その1アジア編 九七

けったいな酒——その2世界編 一一一

おもろいトイレ 一二五

大道無門 一四二

足の裏の味覚 一五九

題字・画／中川一政

挿画／黒田征太郎

装丁／野村高志 (K₂)

シブイ

開高健

究極の遊び



小説家というのは寂しい。指揮者、演奏家、作曲家、劇作家。この手合いは全部観客の顔が見えるし、拍手の音も身をもって感じられる。つまり、その日その日で作品がいかなる迎えられ方をしたかが肉体的に味わえるんで、そこにやり甲斐というものも生まれてくるが、作家業というのは無人島から空ビンに手紙を封じて投げこむようなもの。原稿を出版社に渡したらそれっきりや。一生を空ビン通信で生きているような寂しさは、これは小説家同士でもないとわからんだろうて。

小松左京は、そんな心情を発散させあう悪戯の友だわね。同い年でもあり、行き来もあったのだが、その彼からダミ声で、「俺が持つよってに祇園の茶屋酒を久し振りに飲まないか」との電話がきたことがあった。ことわる手はない。私は、新幹線に乗って祇園へ行った。むろん、彼には何やら魂胆があつての誘いであるが、トリックというのはだまされてからのお楽しみ。むやみにタネ明かしなどせぬほうがよい。

さて、その祇園であるが、私もそうたくさん出入りしたわけではないが、ここは戦争でも焼けなかったために家はどこも古い。電灯の灯も明るくない。まさに谷崎潤一郎の

『陰翳礼讃』いんえいらいさん

そのままや。部屋のいたるところに息をひそめている影を一枚でも引き剝がそうとしたら、とたんに家全体が壊れてしまうであろうというほどの印象だね。廊下の隅、部屋の隅、屏風の陰、エトセトラエトセトラ……。こうなると、酒の肴は「陰影」かいな、と思うほどである。

ちなみに言うとかくけども、小松左京は学生時代は、みがきニシンかシシャモの干物みたいに痩せており、それこそカリカリのコリコリ。私もそうであったが、それがいつの頃からかバルザックまがいの巨体に化してしもうたんや。

それで、そのバルザックまがいが座卓の向こうにドカッと腰をおろした。私はこちらに陣取り、うだうだと税金が高い話などを、身の程知らずにも杯の端にのせて喋っていた。

と、そのときである。「旦那さん、こんばんは」襖を開けて、オバンがひとり、「よう呼んでおくれやしたな。ありがとさんエ」

姿かたちを見て驚いた。とえらいヒネタクワンなのである。ところが、そのヒネタク

ワンのあとに続いたのが、カンピョウ。そのカンピョウのあとに続いたのが、シイタケの干物。こういう三婆やね。

それが、ヨロヨロヨロツと、「こんばんは」、「ありがとさんエ」と言いながら入ってきて座ったのだが、その形容たるや敷居際からヨロヨロヨロツと倒れこんでくる感じやった。座卓に着いたらそのままバターンと心筋梗塞症か、くも膜下出血、あるいは脳溢血の類でいつサドウンデスに襲われても不思議ではない。まったく、このまま逝っちまうんじゃないかというふうな三婆が、私の目の前の座卓にヨロヨロ、もだもだとしがみついたんだ。

これはシブイ遊び！ が始まったと思ったが、ときすでに遅かった。小松が、私と三婆を見くらべながら得意気にニヤついて、

「これが今晚のトリックや。この女たち、歳を三人あわせたら二百を超えるんや。いつも三人一組で呼ぶことにしてあるねん。有職故実ゆうしよくこじつの古いところが聞けて楽しいぞ」

そこで「金沢に、盲目のオバシ芸者で笛のうまいのがいて……」と切りだしたら、

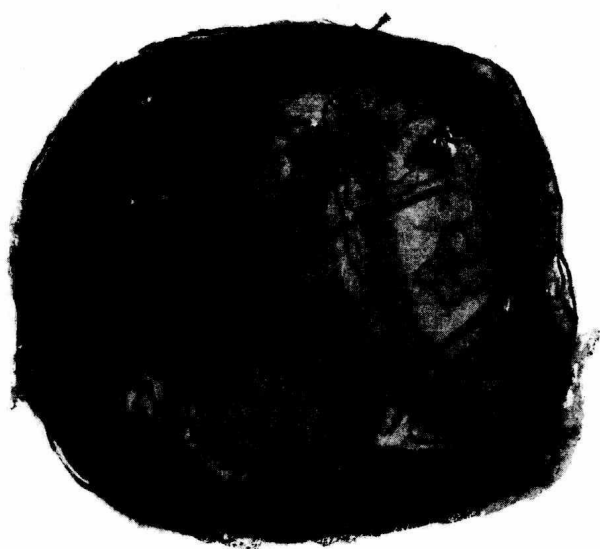
「へえへえ、あの人も亡くなりましたてな。お気の毒なことをしましたわ」とカンピョウが口をはさみ、その生前の活躍ぶりをウンタラカンタラ綿々縷々めんめんるると語り出した。先にも書いたが、祇園の家は陰影でできている。そのカンピョウ婆さんの話が、部屋の隅々にいたるまで、あらゆる陰影に溶けて流れ始めると、その声音に奇妙な色艶がのり移り、これはちょっとした泉鏡花の幽界の気分であった。

それから以後、始まったのが、全部「あの人も亡くならはりましたてな」とか、「ああ、あれもお気の毒なことをしましてな」のオンパレード。

ヒネタクワン、カンピョウ、干しシイタケが三婆三様の死亡情報を我先に言い争い、そのあいまに当方の杯が注ぎ足されていく。

その枯れた指先を見るだけでも三途の河原へ引っ張られていくような気になるのだが、思いを変えれば、ここで杯にうける酒は、酒というよりは、もう少し古い言葉でササ(酒)やね。そんな雰囲気や。

そのうちに身の周りに何やら陰々滅々と陰影が部屋の隅から立ち上がって押しかけて



くる印象になつてきて、「おい、小松、酔狂にもほどがあるのとちゃうか。リンボーの河原で三角の紙切れをおでこに張りつけて酒を飲んでるみたいやないか」いささか辟易^{へき}して言うと、小松は「痩せるのにええで」とニヤつくばかりで埒^{うち}があかない。

とにかくちよつとも陽気な話に踏みだそうとしても、ヒネタクワン、カンピョウ、干しシイタケは「へえへえ、そうでつか」を機械的にくり返し、そのあとは、実はあの人もなあ……。危ない、はかない、逝きかけてる、という基本路線に話に戻る。墓場で井戸端会議やで。

これでは、いくら冥土の土産話にしても芸がなさすぎる。それなら、ということで干しシイタケに三味線を弾かせてみたの。そうしたらねえ、これはさすが。小さなときからお母はんにサシやらなにやらでピシャピシャとやられてきただけあって、なかなかしたたかに腰が張っていて音にもメリハリがある。久しく俺も三味線やら尺八の音を聴いていないんだけど、陰影によく似合うよ。やっぱりああいふ楽器は、血と土の産物であるからバカにしてはいけない。